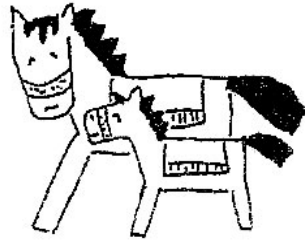


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく〜

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

31年 1月 NO.290



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

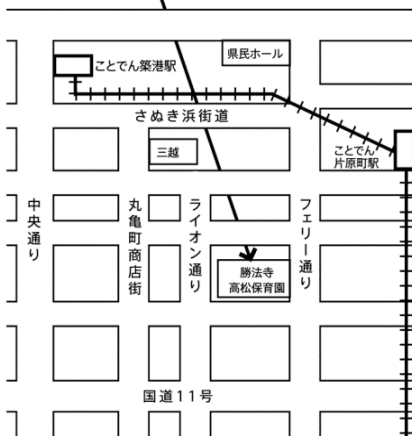
(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		1月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
1月12日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。
1月19日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も子育て 体験においでください。
1月19日	土	絵本と小物づくり 14:00～16:00	不思議なマジックブックをつくり ます。真っ白い本が一瞬に カラフルな絵本に変身します。
1月22日	火	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	みすゞさんの詩を読んだり なつかしいお正月あそびをします ので、どなたでもどうぞ。
1月25日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「こころも体もポッカポカ！」を テーマに、わらべ唄や大型絵本 などを楽しめます。
1月25日	金	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師（小児科医）にゆっくり 相談できます。（予約要）

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して
いますので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談（月～土）9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

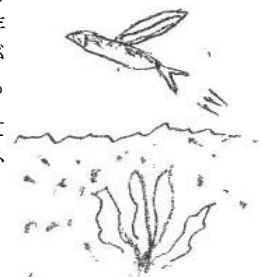
香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童話全集②
「美しい町・下」
JULA出版社

わかい芽が出た藻（も）のかげで、
ぼくらは鬼ごとはじめよよ。
飛び魚小父（おじ）さん、その空を、
きらっとひかかって飛んでたよ。
空のお国も春だろな、
のぞきに行ったらまぶしいよ。
水もみどりになつてきた。
わかいもずくの芽がもえて、

お魚の春



☆今月の内容—「子どもの心に何を残すか」佐藤愛子、著書『楽天道』より

子どもの心に何を残すか

佐藤愛子、著書『楽天道』より

タクシーに乗っていると、初老の運転手が話しかけて来た。

「日本人の暮らしもよくなったもんですねえ。生活が苦しい苦しいって、みんな文句いってるけど、戦争前の貧乏にくらべたら、貧乏のタチがちがうも
んねえ」

街に行く若い女性たちは一応流行にそったおしゃれをし、ブーツがはやればブーツを、毛皮がはやれば毛皮を着ている。子どもだってみな小ざっぱりした服を着、ハナタレ小僧なんていうのは、どんな山奥へ行っても見られなくなった。眼帯をかけたり、耳に湿布をするための黒い耳アテをつけたりしている子どもは、戦前は珍しくなかった。

「わしの子どもの頃は、革靴はいてる子どもなんていなかったね。みな、ゴム靴で、すっぽりと足が入るだけの、何の飾りもないものだったですよ」

「ああ、そうだったわねえ。私もあのゴム靴、はいてたわ」

私は嬉しくなって声をはり上げた。

「わしらのところでは、冬は藁沓わらぐつでね。父親が夜なべ仕事に編んでくれたもんですよ。雨や雪の日のカッパ着てくる子どもなんて、組でも二人しかいなかったからね。あとは毛布を頭からかぶって、目だけ出して、毛布がずり落ちないように、母親が縫ってくれたもんです。靴なんかもなかったからね。風呂敷に教科書を入れて、ほどけないように、風呂敷の端を母親が縫いつけてくれました」

「昔の母親は、ほんとうにたいへんだったわねえ」

「そうですよ。それで八人も九人も育てたんだからねえ」



我ながら年をとったと思うのは、こういう話をしていると、何となく目頭が熱くなって来ることである。いったい昔の母親の、あの頑強さはどこから出て来たものなのだろう。それを考えていると、初老の運転手はこんなことをいった。

「戦争のとき、兵隊は天皇陛下バンザイと言って死んで行く、なんていったでしょう。あんなことは嘘っパチで、わたしの戦友は“お母さん”とって死んだからね。あの頃の母親は、子どものために身を削っているからねえ。削った分だけ、子どもの心に残るんだねえ。今思うと、貧乏で可哀想な母親だったと思うけれど、母親にしてみれば、あれでよかったんだらうねえ。こういうもんだと思っていたんだらうねえ」

運転手の声はふと涙声になり、その感傷をふり払おうとするようにいった。

「それにくらべたら、うちの女房なんぞいい気なもんだよ！」

これからの親は、子どもの心にどんな思い出を残せるか。むつかしい世の中になって来た。父親も母親も、子どものために身を削るのがいやになっているわけではないのだが、削っている箇所が昔と違って見えにくくなって来ているのである。

大半の親が、雪の日のためにレインシューズもレインコートも手軽に買ってやれるのである。自転車も買える。人形も買える。行楽にも行ける。父親のすることは、それらを買って与えるために、ラッシュの乗物にモミクチャになって働くことである。藁沓を編んでやる代わりに、月給袋の封を切らずに妻に渡す。父親が囲炉裏端で背を丸くして藁沓を編んでくれた姿は、^{まぶた} 瞼の裏に残り易いが、月給袋の封を切らずに渡す姿は、いくらその後ろ姿に疲労が^{にじ}滲んでいようとも、子どもの瞼の裏には残りにくいのである。

「親孝行というものは、むつかしいもんだねえ」

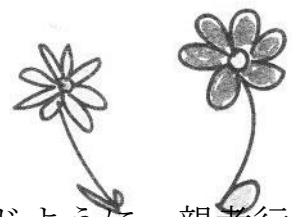
とある子どもがいった。

「だってさ、うちは貧乏じゃないんだもん」

親が子どものために身を削りにくくなっているのと同じように、親孝行のしかたもむつかしくなっているのだ。

「遠足の日、お母さんは暗いうちから起きて豆腐屋へアゲを買いに行き、いなりずしを作ってくれました。その時のお母さんの姿は忘れられません」

そんな作文が小学校の古い文集にあった。しかし今は、ご飯は電気が炊いてくれるし、朝早く起きてアゲを買いに行きたくとも、豆腐屋は昼にならな



いとアゲを作らないのである。かつては貧乏日本が、強くて働き者の慈母や孝行息子を作った。幾つになっても子どもの胸に懐かしくかなしい母の思いで出が残った。日本がゆたかになり我々の生活レベルが向上したおかげで、子どもの胸に残る思い出の形も変わってきた。どんな風変わったか？

現在の慈母の思い出は着飾って大学の入学式について来た姿であろうか？

楽天道は幸福を目指す人生修行

文章技術は措く^おとして、私の考え方・人生への姿勢は変わらず一貫しているということだ。昔も今も全くブレていない。まっすぐ、まっしぐら、人が何と思おうと私は私の信念を持って書き、且生きてきた^{かつ}という姿勢を通して。そこでタイトルを「楽天道」とつけた。楽天は私の人生を支えてきた主義だ。次々に襲^{かんなんしんく}ってきた艱難辛苦に負けずに今日まで生きてこられたのは、楽天主義のおかげである。ならば「楽天主義」というタイトルにしてもよいようなものだが、あえて「道」としたところに、私の楽天に対する並々ならぬ思い入れがあることをご理解いただきたい。

ここに楽天主義ではなく楽天道とつけたのは、ノホホンと楽天的でいればいいというのではない、それは人生修行の一手段、悲運を克服しそれなりの幸福を目指すための修行として、楽天に向う道である、と考えてのことだ。

＊ 「著者紹介」 佐藤愛子（さとうあいこ） ＊

1923年（大正12年）大阪に生まれる。今年95歳。

1969年（昭和44年）『戦いすんで日が暮れて』で直木賞受賞。



小説家・佐藤紅緑^{こうろく}と女優・三笠万里子^{みかさ}の次女として生まれる。異母兄に詩人・サトウハチローと、脚本家・劇作家の大垣肇^{はじめ}。

著書に『90歳。何がめでたい』や『私の遺言』、『晩鐘』、『血脈』、『我が孫育て』、『我が老後』など多数。

